外國叢書

十三

興國

和書門
類 三五二九四 號
函
架
三〇 冊

內閣文庫
和書
類 三五二九四 號
冊 三〇
架 一八四函一三

409
431

內閣文庫
番號 和 35294
冊數 30 (13)
函號 184 267

共三十

国立公文書館
National Archives of Japan

陸軍省
備用書籍

亞媽港紀畧藁

目録

地名及往來之事　附令條
書簡之事
物産之事
風土之事
地圖
雜圖

陸
400

国立公文書館
National Archives of Japan

亞媽港紀畧藁上

江戸　近藤守重　輯

守重曰亞媽港ハ天川（マカウ）天河（マヨウ）瑪瑙（ヒヤウ）廣東（ヒヤウ）ノ南香山縣（ヒヤウ）ノ傍海岸ノ小島ニシテ順德縣（ヒヤウ）新會縣（ヒヤウ）ノ東南ニアタリ長崎ヲ距ルコト海上凡九百餘里北緯二十一度餘ノ地也此地支那ニ屬ストイヘトモ西洋千五百十七年（本朝大永五年ニアル）波爾杜瓦爾（ポルトガル）人（一人ヘルテナント一人ヘーテルミナル）ヲ初テ船來寄寓シテヨリ後（ヒヤウ）ヒヤウ（ヒヤウ）官人ヲ哥阿ニ置ワレヲキ哥阿ヨリシテ亞媽港ヲ兼帶シテ治ハヤリ山上ニ就テ城郭ヲ構エ石火矢ヲ備ヘ營壘ヲ設ケ僧寺ヲ建テ其都城ニ於テ大交易ヲナシ海外近國ニ往來互市ス（日本馬尼剌吹）

暹羅（東京交趾東埔寨暹羅コロマンテ満剌加等ナリ）又リノ屬嶋ニサンヒヤント云フアリ中頃支那人ノ為ニ攻メ逐レシカ土貢ヲ入レ貨賄ヲ奉シ遂ニ永ク土著スルヿヲ許サレタリ（一説ニ紅毛人軍ヲ帥テ覘ヒシカト早ク哥阿ノ援兵ヲ得テ無事ナリトモ云此支那人ヲシテ逐ハシメタルモ紅毛ノシワナルモ知ルヘカラス）是則我邦ニ所謂南蠻人ニシテ其船ヲ黑船トモ云フハ是ナリ

其國名ヲ称スル所ハ支那ノ圖書廣東通志及ヒ新語西洋考等ニ見タルトコロナルハ（漂民ニ問フニ唐人ハ西洋ト呼ト云ヘリ）称呼異音ナルヤト疑ヘド王圻カ續文獻通考ニ廣東香山澳發船往彼（日本ヲサス）トミヘタレハ此邊スヘテ蠻舶ノ泊巢瑣微ノ細嶋錄スルニ足ラスシテ其マカラハ本ト蠻人ノ呼トコロニ係ハル歟 後来清人汪日暐カ廣東水道考ヲ著スニ及ヒテ香山縣東南澳門ニ亜媽寨新村尾等アリトハ載タリキ又天川ハ全ク亜媽港ノ和呼ナリト思ヒシニ康熙御撰ノ輿圖ヲ閲スレハ順德新會香山三縣ノ間ニ師子山星聚山大雁山青霞山猪頭山新槍洲肆水龍護山梅花水湖洲山黄陽山蛭州等アリテ其中ニ天河海ト記シタレハ此邊海支那ニ於テモ天河ト云ヘルニ似タリ（廣西慶遠府ニ天河縣アリ此ト自ラ別ナリ）疑ハ其土人ノ呼トコロヲ以テ此名ヲ圖ニ収メシコトニテ我慶長年間彼カ来書ニ西域奉行天川港知府事ト書キシヲ以テ考合スヘキ歟然レハ此等南陸ノ細嶋昔ハ顯レス今世始テ圖書ニ収メシコトハ見ヘタ

リ 我邦傳ル所府庫黄巴ニク天川ト記シ訳家ノ説ハ香山縣即阿媽港ト記セリ二説トモニ通商ノ時写ストコロナレハ想フニ安南ヨリ八日ニテ媽港ニ到リ媽港ヨリ二日ニテ香山ニ至リ香山ヨリ三日ニテ廣東ニ到リシナ昼夜ハシリシ由ナレハ其間ノ更程若干ナリト見ユ」

其通商始ハ天文十二年八月大隅國種子嶋ヘ船来シテヨリ 此時始テ鳥銃ヲ傳 弘治永禄數年ノ間薩肥豊諸國ニ着船シ交易ニ事ヨセ竊ニ耶蘇ノ邪教ヲ弘メントス此ヨリ二十九年ヲ経テ元亀二年ノ夏初テ長崎湊ヘ入津セシ後八年コトニ五七艘又十艘ハカリモ来リ来リ漸ニ僧寺ヲ建テ妖術ヲ行ヒシカ事覺レテ天正十五年邪教ヲ厳禁シ蠻寺ヲ焼キ伴天連ヲ逐ヒナラ交易ハカリハ許シラカル慶長寛永ノ間邪教ニ惑シ匹夫高山右近内藤飛驒守

及ヒ蠻人ノ種子数百人此港ヘ遠流セラル此頃マテハ長崎ノ者ナト自由ニ往来セシコトミヘタリ 寛永十九年長崎平戸町ノ人別帳ヲ元和二年ニ寄屋女房生国高麗ノモノニテ慶長十六年長崎ヘ来リ天川ヘ賣渡サレ切支丹ニテ元和二年ニ帰宅シテ其後コヒ又小西ト云者父モ高麗ノモノニテ幼シテ當所ヘ参リ切支丹ニテ其年天川ヘ赦リ慶長二年ニ帰宅コロヒト有ヲ以テ見ルヘシ日本人ノ異国渡海并停止ハ寛永十二年也

南蠻人日本渡海一切厳禁ノ旨ニテ在留ノ蠻人等一人モ残サス帰国セシ九 天文十二年ヨリ九十五年ニ至ル此事蘭書ニモ渡海ヲ禁セシハ宗旨ヲ弘ルヲアラカトテナリト見ヘタリ 此ヨリ後比年来船シテ以前ノヨトク交易ヲ請トイヘ共堅ク禁シテ許サス就中正保四年哥阿使者ト称シテ入津シタリシ片ハ西国ノ諸侯共卒五萬人軍船千五百艘ヲ発シテ警固違禁ノ不法ヲ責ノテ帰帆セシノ貞享二年伊勢ノ船漂着セシヲ送リ来リシ片

モ渡海制禁ノウヘハ漂着ストモ送リ来ルニ及ハス日本人ハ其地ニヨクヒ如何ヤウヒ心次第ニ計フヘシ向後交テ蠻人ヲ差越スマシキ旨キット諭シテ帰帆セシメラレシ後ハ此度甲寅ノ漂民媽港ニ到ルヲ以テ其国事ヲ聞ノ終トス

其使者ノ吏ハ得テ詳ニセス然レヒ通信事畧ニ書ト物トヲ奉リテ其使ヲ引見セラレシコトハ慶長十七年ヨリ始リ元和七年ノ後ノ使来リシコト聞スト載タト今按ニ慶長十六年上野介正純カ南蠻船主ニ復スル書ニソノ行人東魯訥一介遠ク到執贄而便殿ニ見トミヘ後藤光次カ阿媽港諸老ニ致ス書ニ且又留貴港ノ官人一両輩寘于我駿府云云今之来伶東魯訥以其貴族親拜趨我君唯君前語毎及島船之事余既為應答之職云云ト載タハ十六年己ニ引見セラレシコトアリト見ヘタリ又長谷川左兵衛カ阿媽港父老ニ呈スル書ニ前日五和國使者東魯訥来于吾國時藤廣在長崎故吾主君不與硃書印于魯訥今藤廣為請之於是有允容而賜硃書ト云ヘハ此時御朱印ヲモナシ下サレシニヤ

竊按ルニ安南及亜媽港ハ我邦ノ西南ニアタリテ東海廻ノ船動モスレハ漂泊スルヿ幾度ヲ知ラス記書ニ見シハ薩摩ノ商船安南ニ至ラントテ此港邊ヘ漂泊シ南蠻ノ助ヲ得テ舟楫ヲ修テ五島ヘ回リタルヲ謝セシコト義弘ノ答書ニ見ヘシ後貞

享二年伊勢渡會ノ船漂着シタリ安南ハ仲磨以来明和四年
奥州并常州船漂着セシコトニ三度ニ及ヘリ甲寅ノ漂民等ハ安
南ニ着シシヨリ媽港ヘ渡リテ廣東ニ至リシナリ此外見
聞ニ及ハサルモノ多カルヘシ然レハ此後トテモナヲ此地方ヘ漂泊
センコト有ルヘケレハ今ニ於テ其国々ノ詳ニスヘキコトナリ其
故ハ甲寅ノ漂民初メ帰リ来リシ時安南ハ知レタレトマカヲ
トニ至テ知ルモノナシ唐商ニ問フニ知ラス明和七年ノコロ唐商ニ尋ネラレシ時ハ廣東ノ
人少シノ嶌ヲ長崎ト稲佐ト對峙スルコトシト巻ヘシヨシナレト其記逸セリ今ノ
甲寅并ケイスヘルトヘシミイニ尋シニ紅毛ハ媽港ヘ往サレハ知ラスト答テ廣東遐嶌ノ畜
ヲ写シ出クリ疑クハ邪教ノ国ナルヲ以テニヲ憚リシニヤ後ニ予ソノ語ルトコロノ詳ニシ且圖ヲ以テ
質シテ始テ媽港ニ違ナキコト分明ナリキ其地ニテ日本ハ宗旨違ヒヱヘ取上ケナト云シハ貞享度タトヘ漂着ス
トモ送リ来ニ及ハスト命セラレシヲ云ヘルベシ往年明和ノ頃カカヤン國ト云ヘルニ漂着シテソレ
ヨリ内地ニ至リシモノアリ疑ハ此港ノ傍ニ在リシカケヤン嶌ニモ
アルヘキカ此等西洋耶穌ヲ奉スル國々ナレハ如何ナル事シテ
我漂民ヲ教誘センモ知ルヘカラズ又漂民帰国ノ後ハ例ニ他
國住居ヲ許サレサレト亦心得アルヘキコト欤此港昔シ嘗テ
邪教ヲ傳ヘシ国ナルヲ以テ特ニ其事ヲ叙ル一如右

○采覽異言曰マカヲ又アマカワ阿媽港在廣東即西洋商船所泊之
私灣也事詳于渓文献通考我慶長元和間歳ニ遣使来献或称西域奉行天川和府事者皆是波兩柱丸乎ノ船長也図説阿媽港係之滿剌加地者
○今按續通考ニ媽港ノ字ニヘス訛リ其文下ニ載ス

○外國通信事畧云亜媽港卧亜此國ノ事ハ西洋歐羅巴の地方

波羅多加児すなわち官人を印亜と為して亜媽港
に象帯して治めしむ是則我が南蛮人といふ所の形を異船と
なす（伊西把猶亜より呂宋と治め波羅多加児より印亜と治めるの
俗余阿蘭陀より咬唎吧と治めるこれ事もれ洋中にあり）我が船通じ
事八慶長の初りの事にて物とを奉つて其使を引見られし事八
慶長十七年より始り元和元年の後絶ゆるとなり用代

○長崎志云意太里亜國希留都葛児國諳厄利亜國此三ヶ國ノ
者共呂宋阿媽港哥阿（哥阿南蛮国の地名南天竺の近方より阿蘭陀人スラアタト云）三所ノ地ニ在留スト云

○華夷通商考云亜媽港（唐顔アマカ日本アマカワ俗因テ天川ノ字ヲ用テアマカワト云リ）廣東國ノ南ニ當
レル所ナル由南蛮人住居スト云海上日本ヨリ九百餘里ナル由ニ傳フ

○續文獻通考（明王圻輯四裔考）日本部云薩摩州乃各處船隻慣泊之地今
從此発有往呂宋船田集交趾船三隻東浦船一隻暹羅船一隻佛郎
機船二隻興販出没此為咽喉也一羅械不過廣硝烏銃為害硫黄日
本産出硝廣悪土煎煉亦多惟烏鉛乃大明所出有廣東香山湾
発船往彼販賣煉成鉛弾各刃俱盛其旊鎗弓箭腰刀烏銃鐵
牌盛甲誠亦不缺

○水道考（乾隆癸卯汪日暐著）廣東部云江自英德出境下清遠縣云云両江既合旋合
為二云云衆水所歸瀦為巨浸是為珠江云云江之中有海珠寺（即中枹臺）與
水浮沈巨浸不没寺之東南有浮虚山江乃由分派海而下烏洲山過小
欖山歴香山縣所屬諸処至於前山（有廣州海守分府衙門專管往来入貢
貿易外洋夷蛮等類）
又下三十里則為澳門志称香山百里外為澳門其山從海濱発支加

蓮蓬状柳入海中有城垣内皆番人所居離澳設関以稽出入
其地不産米鹽蔬菜所需皆自各治運出城中設有西洋官職
粤東文書事件往来俱用通事其内外尚有亜媽寨新村尾
龍嵩廟板帳廟文糧廟花王廟等古蹟凡内地所用犀象香珀哆囉嘎吱羽緞羽紗藤木等貨皆
従此交易澳門之西北為香山縣香山之水惟十字門為大治東南有嶌
曰星即為九星洲又名九星洋併治東一百七十里之丁零洋云云
香山之西稍北為順德縣云云
○大明一統志云廣州府順德縣在府城西八十里本隋南海縣地唐
以後皆因之本朝景泰二年始析其地置此縣編戸一百五十七里
香山縣在府城南一百五十里本唐廣州東莞縣香山鎮宋紹興末
陞為縣仍割南海番禺新會三縣瀕海之地益焉元仍旧本朝因之編
戸三十六里　新會縣在府城西南二百三十里本漢南海郡地東晉分
置新會郡縣隋郡廢以縣隷岡州大業初州罷以縣屬廣州唐初
復以新會義寧二縣置岡州開元中州廢復以縣隷廣州宋元仍旧
本朝因之編戸一百三十八里
○カウランツトルコニ云此書ハ紅毛ニテ萬国ノ事ヲ記タル書ナリ亜媽港又マカオト云此地ハ支那ノ
廣東ノ南ノ海岸ニアル小嶋ナリ昔百五十年前波尔杜瓦尔人此島ニ船来
シテ城郭ヲ構ヘ交易ヲナシ貨財富足シテ自一島ニ主トノ刑政ヲ行ヒ
シカ和蘭陀人東印度ノ通商弘マリテ後其勢衰ヘ和蘭暦数千六
百八十年丁未朝元孫元年遂ニ支那人ノ為ニ攻メ逐ヒ支那ノ附属トナリ

今支那ノ國王ニ土貢財寶ヲ獻シ波尔杜瓦尔ノ人モ此島ニ居ルヲ免サレテ大商賈ヲ營ム此地狹少ニシテ石多ク不毛街衢ノ凡所甚高低アリ然レトモヨキ湊會アルヲ以テ近鄰アマタノ小島ト互ニ小船ヲ浮ヘ專ラ互市ヲナシテ至テ繁華ナル場ナリ波尔杜瓦尔人ノ構ヘタル居館甚大ナラストイヘトモ湊口ニ入レハ則見ユルトウ

又云廣東ハ支那ノ大國ニシテ福建廣西湖廣江西及ト東京ヲ以テ都會大小十四アリ海南亞媽港ノ二島此地ノ治ナリ砂糖絹等多シ

○ハアレンテインニ云　此書ハ紅毛ニテハアレンテイン卜云人万国ノ夷ヲ記シタル

アンノヲ千五百十七年ホルトキスノ人初アマカワニ來ル其名曰ヘルーテーナント曰ヘーテーレーヨーアーンーラ此事オソーリーユースー之書十巻ニ見タリ

國家彼レ等ヲ是地ニイル、ヲ欲セス故ニ住居ナシカタシ然レトモソノ後漸々國朝ノ俗ヲ習得テ遂ニ住居スルヲ得タリ一ニ又マーカーワ尼云ナリ

案スルニ此レハ遠方ヨリ見タルナリ廿六番ハ平面ノ図廿七番ハ表裏尼ニ詳ニ図メ有

是地ハ北緯二十一度餘之小島ニノ向ハ唐ノ地ニ對ス陸ニ

近キ通リ路アリ狹ノ長シ其トコロ遠泻ニメ足ラヌラサズメ陸
ニ行ヘシ濱ニツイテ城下ノ外ニ石垣并大門アリ此ヒハ城下
ヨリ陸ツヾキテ運送ノ物ヲ受ケ送リス又内ニ會所アリ諸ノ
價人茲ヲ通リテ入札ヲナス一條大路アリ是ハ唐人往来
スル所ニメポールートーキースニ禁ノ不許通
島アリヤーシーヤーント云元来荒野ニメ至テ貧地也中古ヨリ
唐人此ヒヲポールートーキトスニ予ヘテ家屋ヲナサシム皆倚盧
茅屋ナリ是ノ島陸ヲ距ル三十里マーカーワハ十里ナリ故
ニポルトキス領スルヿヲ得因テ朝廷ヨリマーンーダーレーイ
ーン郡主也ヲメ賦税ヲ収メシム他ノ都城ニ均シ其後アーシーダ
ーレーイーンヲス勞メ歳毎ニ國朝ヘ拾貫目ツヾ献ス
茲ニ營アリ廣大ニメ種々結構ニ家屋石垣郭ナト堅固ナリ
有三城郭盡ク山上ニアリ其郭廣衍ニメ堅固也是ヒシーントト
トパーロノ所領法制嚴厲ニメ石火矢四十挺ヲ置キ不虞ノ寇ニ
備フ其玉目三十六斤ヨリ四十八斤ニ至ル
第二ノ城其名ヲノスタラセンボラデベンテフランヒヤト云是ヒハ小城ニ
メ石火矢八挺ヨリ十挺ニ至ル
第三ノ城ハ別ニ高山ノ上ニアリソヒヨリ諸方山ヲ候ヒ望也号メノ
スータラーセーホーラーゴーイールト云惣テ石火矢五六挺城裏ニ備ヘ
リ郭ハ岩石ニテ疊ミ周シソヒニ小鐘ヲ懸テ北海南海ヨリ来船アヒ

ハ鳴之知ラレムルナリ

城下ニ數堡アリ地ヒキレ夫ユヘ牆壁堅固ニメ有其名ハレントヤー

ゴテインバルラノスタラセンホーラデルホンハツトレントフランレメコ及ヒ

レントヨアント云

三郭アリ一ハ屬海一屬陸其初ノ一ハ至テ堅固ニメ美麗ナリ諸邦

ノ大船常ニ港ニ碇ヲ入レ相連屬メ觀之恰モ萬家ノ立

タルコトシ又別ニレドイト構ナヘシ在山ノ上ニ見ユ此レハ時ニヨリ

入用アリ難ヲヨケノカルヽ時ノ便ナリ是ノ構相應ノ石火矢前ニ

見ユ何レモ大筒也各壬目廿四斤又別ニ一アリ是ハコノ郭中在

ル亦壬目五斤ヨリ六斤ノ石火矢アリコレハ郡中ニ事發タル時

加勢ノ用意ナリ此方ハ明ケハナレテアリ其訳ハ国王自詔命ヲ

下レテ制スル故ホールトーキースドモ能出精ノ事ハナリ

亦有一營堡城下ノ南方ニアタリノスタラセンホラデルボンパツトノ西

南ニアリ見ルトコロ八斤ヨリ十斤三テノ石火矢唐金ニテ造ル其

他鉄石火矢ト見ヘタリ此山ノ下ニ在テ近クミユル岩ノラペン

ナデフランレヤト云

曾テ石火矢藥造制スル処アリ城近ノ危キ故廢之其事尚

久カラス亦前キニ暫ク寺屋ナル家アリ是ハ本城カサリノ為

ナリ皆半月ノ如ク筑キ或ハ尖中尖リノモノアリ之ニ石火失

居置テアリ

堅郭ノ中ニテシントフラスコト云ハ至テ廣大ナリ第二ノ郭ヨリ見ルトコロノ石火矢十五挺ヨリ十六挺ニ至ル此郭ノ角一方海中ニ筑出シタリ

千六百三十二年是郭ノ側ニ一ノ平面地ヲ造リ四十八竹ノ鐵石火矢ヲ居置ノ也是ヲ以テ放テハ遠クカーケーヤーント云嶋ニテ至ル但此郭石垣塀ナドハ陸ノウチ也然レ𪜈城ハ屬海

第四番ノ堅シントヨアント号見之城ノコトシ其國門ヲ出ル一遠カラスノシントラサロト号營アリ僅ニ石火矢三四挺前ニ備フ是ノ石カキヲ攀テ山ニ登レハ城ノ側ニ出是城ハシントパウロト云其ノレヨリマタ行ハ僧エスウイトノ許ニ至ル編戸至テ美麗ニ石壁堅固ニ見エル

大城アリ其一方海中ニ出ツ岩石ノミニテ寄附カタシ其上石火矢ヲ置ヘキ処ナリ遠于潟ニノ船モ寄ルヿナラス大ナル轉石アリテ要害第一ノ所ナリ

自昔至テ美麗ノ都城アリ其中ニホルトキス大ナル商賣ヲ至シ時節ヲ不厭四時爰ニ居着スルナリ彼ラ此城下ニ唐人大工ヲ傭テ唐造リニ家ヲ美麗ニ構ヘ居ル

茲ニ種々ノ僧アリマヅコスウエ説法者トミニカチニ僧也アゴステイチニ僧フランシスカチニ全ハケイチニ全是地ハシントカーラノ所領惟千六百三十一年之建立ナリ曾牝牛ノマミラノ都ヨリ取寄漸蕃息

△アゴステイチニ僧フランシスカチニ全ハケイチニ全是地ハシントカーラノ所領

至于今數萬頭アリ
爰ニ數多ノ美麗ナル寺アリソノ中ニテモドムケルクヲ至テキレイ也格別
諸寺ノ上ニ冠タリ其外ニシントロレンプー又シントアントラヨ別郊
外一アリ是シントラサリュスヒ建立ニシ則チ六百三十三年ノ夏ナリ
ソノ時ハロキーケルク寺也許ソラヲ離ルヽヲ歎ス蓋二十年許前ノ夏
ナリ故ニ此処ノ法度禁制等キビシクナリ他ノバロキエルマテ重クナリタル也
是城下ニ大ナル達道アリ横街ニ至ルヒテ人家常ニ異也高大美
麗ニシテ舊軒嚴整ナリ
僧エスウイテ及他人并書籍筭ニ至ルマテキラハレタル故爰
ニ居ルヿナラスシヤムニ志テ裝足ス惟チ六百八十五年ナリ此ノ
節ニムポニ趣ク
昔ヨリ國政主アリテヨク治リヌ阿蘭陀人訪来ルマチノ詰テ軍
ヲ企テ彼ヲ風クサトツテコアノ下王ニ告クコアヨリ町奉行ヲ以テ士卒
三百餘人ヲヒキヒシメ并兵粮ホヲ贈賜リヌリ蓋千六百七
年ノイントフランシスコマスカレナスト云モノ守護シテヨク郭ヲ守
ル故都下ノ人ニ至ルマテ客易ノ(是ハ蘭人ヨリ)ニ追拂ヿ不叶ナリ
是都ハ至テ大也マニラ日本咬嚩吧トンキンカウチヤンポーチヤシムム
コロマンデルマロカ其他諸邦ニ来往交易スルノ産物黄白
糸類織物綿類布麻其外種々陶器茶朱水銀牡丹
山帰来大黄射香明巻類不可枚擧

彼等出帆ハ七月中ニテ日本ニ輙ク帰帆ハ十一月ヨリ其交易物ハ金銀ヲ蒔繪ノ他種々積帰ル其後日本ヨリ渡海ヲ禁シタリ故ハ恐クハ宗旨ヲヒロムルヿモアラシカト

唐船ノ咬噶吧来リアマカワヘ来ルヿ表ムキニテ交易自田ナリ然レトモ

唐ノ帝王ノ牌ヲ受テイタスヿハ今茲唐帝王崩御ノ皇子即位又牌ヲ改惟千七百二十三年也唐船咬噶吧ヘ来ルヿナシハボルトキスモアマカワヨリ咬噶吧ヘ来ルヿナシ

彼ヲ渡海年号ニ両度カレトウノ河口チンチイウニ運送ノ数多ノ珍物ヲトリ帰アマカワニテ利シエンヲ得（宇重日チンチイウ泉州ナルヘシ）

アマカワハ漢土ノ疆場ニノ僅ノ小都會ナリ萬事謙遵シアル故

今ニ相絶テアリテウヒクヿナシ

是實ニ支那ノ記録ニ在リ今北京ニ種々ノエスウイテン僧也多クテルアータムスカル。マテエスプリセエス。パントイヤ。ヘルデナントヘルヒイスト及其餘カワルニイトマアラス天文學大エエレハ諸侯ノ膝下ニ遊テエエロヨク生計ヲナス僧ノルイハ各ノ宗旨ヲ護ル漢土ノ城下ニ千六百八十四年千六百八十五年西洋ノ間ニ入来リ知レタトフリ也元ト交易ノタメニヲラズ國中ニヒロク遊行スルヿヲ許サルニナリ

○泰西圖說云ポルトカリヤノ屬國ハゴアニハヂユ三ハマカヲ其地モナ（今大清国也）ノ廣東ノ南ノ海岸ニアル小島ナリ和語ニアマカワト云ヘリ

○風說書　寛文七未年唐吹嗔吧出シ之船形ヲ越覺

一去年四月ニ唐吹嗔吧ヨリ唐人ノ達ノ人ノ欲侍者ヲ中入ル志福州ヨリ出シ系泥人自由高麗仕度ノ次天川ニ在ル南蛮人ノ系泥高麗申ニ付天川ヲ進拂給ル様ニ申ス川きんの大將ヨリ初ヲ以ての考ヘ皆去年秋何ヲかんとう天川人ノ船ヲ持ヲ南蛮人ヲ進拂

ヲ以南蛮人共大船ニ乗ル天川ヲ出シ南蛮人ノ大將ノ考ヘ乃ち船一艘川口ノ沈ム船損仕ル今一艘ハ海ニ流ル二ツ有リ

又一艘ハ紅毛紅毛ヨリ福州ヨリ出シ船ヲ奪ヒ取ル方ヲ去年極月ニ何ヲ吹嗔吧ヨリ出シ中ヲ出シ歟ヲ乃船ヲ奪ヒ

一去年ヨリ上ヲ毛ヲ毛ヲ出シ人ヲ乃系泥人軍いヲ家中ノ也ヲ啓ヲ乃ヲ上

未五月三日

おらんだかぴたん　ぜーるとるかぴたん判

○寛永十九年午長崎平戸町人別帳（此外ノ町ニモ此類ヲ有ンヘシ予ノ所見ノ古帳ハコレノミナリ）

一年六十

生國ニ羅ニ之ヲ以ヒ仕ハ年ハ長崎ニ住ル

川崎ヤ助兵衛

七郎上町に系列切志うんよりの国元中屋敷孫市代の和蒲
町ところひ一面の家元成大光ちを新ちん
一年の後こ

生国言葉ちの事也は年代八代系図拾ひ也屋敷別
天川に文政切志うんと文政元和二年と個老仕和蒲町に家
中屋敷孫市代は旧町ところひ一面の家にあり大光ちを新ちん
ちの切志うんの房ちの言葉のちの所中妙味の上性来
清ちを言葉也清水中で五郎ちん
一年拾四

生国西私ちの七郎ちの老之来福家ち法春ちを新ちん西新屋

女の　女房

北方小四郎

よりの切志うんの房ちの所中屋敷孫市代の南町ちの旧
家国ちを新ちし拾年ち家有町ちの死仕ち父生国ち龍ち名賀
よりの七郎の南町系列切志うんおかを年天川に系蒙ち二年
七郎の南町ち個老仕中屋敷孫市代旧町ところひ旧家国
寺ちを新中ち言之ちんうんち有寛永十三ち
乃ち天川ちを

○長郎夜話云黒形入津始ち事　元亀元年庚申歳ち
南蛮の黒形一艘津の和の蒲福田ち不ち漂ひ来て為西
可黒黒ち次年ち渡日の渡ち見て過ち黒一人渡ち

年号を文禄と改て元年と号し
大村氏を長崎の奉行に成る
地割をして三年大村戸数
五千四百余人の内
日乃高物を積む
年八月に肥前の
ようなりしかり

一邪宗門制禁幷黒船傳来之事黒船年毎に来りしに
外浦に入り天草三年の農民邪宗を信仰領主
堂を焼 南有馬原の城乃廃城なれども要害二万人
籠城

寛永十四丑年十月なり則関東より板倉氏内藤氏
九州の諸大名勢の軍士寄せ
倉氏親子の
大江四郎
獄門
う今有馬
氏に向て
永日本
殺して

○長崎志云隅州種嶋南蠻船来着之事　天文十二癸卯年八月
大隅國種子島ノ内西村ト云所ニ南蠻船一艘来着セリ所者見
之船中人物奇異ノ行粧ナル故如何ナル者ソト尋問シニ南蠻國ヨリ商
買願ニ依テ日本ニ渡海セシヨシ答之則陸上ニ揚リ所ノ者ニ出會數
月滞留ス在留ノ内蠻人共長三尺ノ小筒ニテ鳥獸ヲ打取食物ト
ス此地ノ者トモ其打様ヲ習得テ重寶ナル物ナリトテ其名ヲ重寶
ト云習ハセリ後年小キ鉄炮ノ種ヶ嶋ト云ハ此来由ナリ此船ホトナク
帰帆シ翌年又着船シ此度ハ細工人等ヲ連来リ鉄炮大小造リ方玉
薬ノ製法等ヲ委細ニ傳授セリ其頃泉州堺ノ橘屋又三郎ト云者
此所ニ居合テ其法ノ秘密ヲ習得タリ則右ノ傳来ニテ後来堺ノ地ニ鉄
炮細工人有之ト也

一九州諸処南蠻船渡来之事　其後弘治永禄數年ノ間薩摩
肥後肥前豊後豊前諸処ニ蠻船渡来リ商買ニ事ヲセ密ニ切支
丹ノ邪宗門ヲ勧メ入ケリ就中豊後大友宗麟深ク邪宗門ヲ信敬
シ城下臼杵ノ地ニ蠻船ヲ今滞留領内ニ切支丹寺ヲ造立有シニ依テ
國中男女郷村卑賤ニ至ルマテ邪教ニ立入ル者甚多カリシトナリ
又肥後小西攝津守モ邪宗門ヲ信仰セシ故領地又ハ同國天草
ノ者其外肥前島原郷村者共多ク邪宗門ニ立入リ是寛永年
中天草嶋原一揆蜂起セシ火殃ノ根元ナリ
一長崎湊ニ南蠻船着岸シ次忍ニ横行之支　元亀元庚午年長

崎湊ニ南蠻船着岸ス去ル天文年中種子島ニ来着以後二十八年之間諸処ニ往来シ今年初テ長崎津ニ入船セリ蠻人共當湊ノ地勢ヲ考ヘ見ルニ四方ニ高山峙ケ環リテ風波ノ難ヲ凌キ海底深クシテ舟楫ノ進退安穏ナリ向後此地ヲ渡リ湊ニ定タキ旨領主理專ニ願ヒ許ヘケリ然ルニ彼蠻人共本来貪欲無道ニシテ邪智深ク表ニハ商賈ニ来レリト云ヘトモ内心ハ他方ノ国土ヲ奪ヒ取ヘキ謀計ニテ諸人ニ金銀財寶ヲ與ヘテ恩惠ヲ施シ或ハ奇怪ノ妖術ヲ成テ愚民ヲ感服セシメ機ヲ見テ切支丹ノ邪法ヲ教ヘ導シ故其宗門ニ帰依スル者甚多ク悪執染着ノ餘神社佛寺一字モ不残破却シ剰ヘ長崎地内ニ切支丹寺数箇所造立シ猶又市町郷村ニハ寺領ニセシ事ヲ願トイヘトモ理專承引ナカリシヲ種々難題ヲ仕掛ケ巧計ヲ盡セシ故理專モ是非ナク許容有ラ此地ヲ彼徒ニ與ヘタリ是ヨリ彼輩當地領主ノ如ク仕置等ヲモ取捌キ恣ニ横行シ暴悪無道ノ仕業年内ヲ経ルニ隨テ甚勇猛ナリシト也

一信長公京都ニ南蠻寺被令造立事　或書曰天正二甲戌年織田信長公御前ニテ近年長崎ニ南蠻國ヨリウルガンバテレント云奇妙ノ異國人渡来シル由言上セシ者有シニ信長公急キ其者ヲ召寄可ト彼異人ヲ被召シニ日ヲ経テ江州安土ニ参着セリ彼異人種々ノ寶物ヲ献上シ信長公ノ御前ニ罷出ル汝何ノ為ニ日本ニ来ルヤト御尋有シニ彼者佛法ヲ弘メン為ニ渡来ル由重テ御

召有ヘシト城下妙法寺ニ差置ル其後大老昵近衆ヲ召シ御評
議有シニ人ノ儒者刑部正則ト云者進出彼者ノ體相誠ニ或
狄ノ輩ニテ人倫ノ正道ヲ知タル者ニハ非ルヘシ後年如何ナル災ヲ成
サンモ計リ難キ者ナレハ速ニ本國ニ被追返可然旨言上ス然ルニ
信長公暫ク御思案有テ仰出サルヽハ夫昔年百濟國ヨリ佛像
経巻ヲ渡セシヨリ以来今以佛法繁昌セリ若又最上ノ佛法ニテモ
可有ヤト家臣ニ仰テ洛陽四條坊門通ニ四丁四方ノ地ヲ与ヘ一寺
ヲ造立セシメ寺領五千貫ヲ与ヘ侍者等ハ本國ヨリ可呼寄旨被
仰付仍テ長崎往来ノ蠻船本国ニ通達セシニヤ翌年フラテンバテレン。
ケリコリヤリイス二人ヲ初数人渡来リ猶又獻上物数ヲ盡シ捧ケ
ケリ信長公御目見被仰付彼寺ニ在住セシメラル是ヲ南蠻寺
ト称ス斯テ寺中ニ於テ教論説法等事ハ無之洛中洛外ノ諸
人或ハ野山ニ行倒レタル乞食非人難病ノ者廃疾者等ヲ寺中ニ
集メ衣類食物ヲ與ヘ其病症ニヨツテ内科外科ノ藥方ヲ用悉
ク平愈セシメ又ハ貧窮ノ者ヲ寺中ニ置キ妻子等迄養育シケ
レハ其慈悲厚恩ヲ感スル者幾千萬ト云數ヲ知ラス被療養
ノ内蠻人ヲ語リケルハ汝等難病貧苦ヲ受ルハ生得ノ因果ニヨ
レリ我南蠻国ノ人民ハ天帝ノ教ヲ守ル故病苦貧窮ノ者一人モ
無之汝等我教ヲ信用セハ現世後世共ニ安穏快樂ヲ得ヘシト怪
シキ宗門ノ唱ヘ言等ヲ教ヘ奇異ノ法術ヲ見セシメル故愚智蒙

昧ノ者共皆其法ニ帰服スルヿ甚深重ナリシト也年月ヲ経テ
三好松永高山ヲ始ノ大名籏本ノ歴々地頭代官其以下畿内諸
國ノ人民彼宗門ニ傾キ靡ク者際限ナカリシハ信長公此事聞召
及ハレ惣シテ佛法ヲ尊信スル檀家ノ者ハ謝儀禮物ヲ捧テ其教
ヲ授ル習ナルニ彼徒ハ檀家ノ財物ヲ奪ヘテ法ヲ勸ルハ心得難キ事
ナリ其上最初日本ニ渡来ハ商賈ノ為ナル由ナレハ金銀利倍ヲ貪
リ求ムヘキ支ナルニ病苦ノ者ヲ療養シテ許多ノ費ヲ厭ハス遠
海ヲ凌キ来リ無益ノ慈悲ヲ施スハ是只事ニ非ス必定之已カ
恩惠ヲ以テ此国ノ人民ヲ味方ニ懐ケ置遂ニハ我国土ヲ奪取
ヘキ謀計ナルヘシ先年刑部正則カ詞ニ少モ違ハスト大ニ後悔有テ彼
寺ヲ破却シ蠻僧等ヲ罪科ニ行シト甚タ忿激ノ御氣色成シ
カハ諸国騒乱ノ時節故暫ク差置ル折節秀吉公毛利輝元
ト對陣ノ時明智日向守ニ後詰被仰付信長公ハ京都本能寺
ニ御出駕ノ処明智逆心ヲ起シ信長公ヲ討奉ル秀吉公程ナ
ク明智ヲ滅シ給ヒ其事空クナリシト也

一秀吉公南蛮寺破却之事　天正十五年丁亥秀吉公筑前
御滞留ノ時長崎頭人共推参シ數年南蛮人邪法ヲ授ケ
神社佛閣ヲ破却セシ事委細御聞ニ達シ藤堂佐渡守ヲ長崎ニ
被差越伴天連共早々可令帰国旨御條目ヲ以被仰渡翌年
十六戊子年長崎ヲ御料所ニ被仰付為御代官鍋嶋飛騨守ニ

當所ヲ御預ケ置ル旨御條目ヲ以被仰出之
其後秀吉公諸臣ヲ集メ被仰出ハ去ル弘安年中蒙古韃子
軍船數千艘ヲ催シ九州迫襲ヒ来ルトヱヘ共諸処ノ神社各霊験
在テ神風大ニ起リ彼軍船悉ク沈溺シ兵卒各滅ヒセリ然ハ
異國ヲ恐ルニハ足サレド此國ノ人民已道ヲ捨テ佛神ヲ破却シ
邪法ヲ信用スル者ヲハ後年必國ノ騒乱ヲ成ヘキ旨ヲ切支丹
ノ邪法急度制禁スヘキ旨ヲ増田右衛門尉ニ軍兵千余人被差添
京都四條坊門ニ被差遣伴天連共ヲ捕テ長崎ニ送リ南蛮寺ヲ
焼拂ヒ五畿内ヲ初メ諸国ニ於テ邪宗門ニ傾キシ者共ヲ改宗セシ
若難渋スル者ヲハ急度死罪ニ行ハルヘキ旨被仰出之

文禄三甲午年京大坂ニ隠シ居タル伴天連六人黨類二十余人搦
捕テ長崎ニ送リ斬罪セラル

一有馬氏蛮船焼討之事

慶長十乙巳年（奉行小笠原一庵）今年
如何ナル支ヘヤ有馬修理大夫船一艘廣南ニ差向タリ其頃ハ異國渡
海御免ノ砌ナリシニ此船難風ニ逢ヒ阿媽港ニ漂着セシ処蛮人共大
勢押掛船中ノ人數ヲ殺害シ荷物悉ク奪取タル由修理大夫聞
届ケ重テ阿媽港ノ船渡海セシ時一艘討取此鬱憤ヲ散ント
右ノ旨趣ヲ御内意御願被申上シ由也同十三戊申年（奉行長谷川左兵衛）阿
媽港ノ蛮船一艘長崎湊ニ来着ス修理大夫於江府聞之御暇
ヲ願ヒ夜ヲ日ニ継テ長崎ヘ到着セリ然ルニ修理大夫領内ノ土民

ニ邪宗ノ者有テ此郡ヲ蠻人ニ内通セリ蠻人共急財物諸具ヲ
船ニ載セ出帆ス度々成折節東北ノ追風ナレハ帆ヲ引揚テ海上
遥ニ駛リ出タリ修理大夫早速兵船ニ取乗追掛シニ大船ニ順風ヲ得
テ殊更日暮ニ及ヒハ可逐付様モナク空ク打守リ居タル処ニ俄ニ西南ノ
風ニ吹替リ彼蠻船沖ヨリ湊ノ方ニ真逆シマニ吹戻サレ香焼島ノ
外海ニ漂ヒ来テ碇ヲ卸セリ船中用心猶ノ火矢鉄炮ノ数多備
ヘ置タレハ輙ク可近付ヤウモナク是ニ依テ有馬氏香焼島内
海ヨリ外海ニ数十間ノ地ヲ日夜ニ堀通シ小船ニ焼草多積載セ
蠻船ノ繋リ居タル後ヨリ急ニ漕付ケ火ヲ放ケレハ彼蠻船ニ燃付
テ可妨方術モナク一船悉ク焼ケシ蠻人共ハ残溺死セリ修理大夫
思ノ仇ヲ報ヒテ帰城セリ

一耶蘇主意訴人ニ出事　慶長十六辛亥年肥後國八代ヨリ僧一人
駿府ヘ参上シ訴訟ノ願者アリ其前ノ肥後国主小西摂津守造立ア
リシ切支丹寺ノ住僧也然ルニ當住僧其ニ無體ノ難題ヲ申掛ケ寺ヲ
追出セリ仍テ彼僧ヲ召シ是非ヲ御糺明被成下ハ為御忠節切
支丹宗門主意ヲ言上可仕由依之相手ノ僧ヲ駿府ニ召シ委ク御詮
議有シニ相手ノ僧非分ナル故御裁判ノ上令追罰ヲ件僧御高
恩ヲ有難ク奉存切支丹邪教ノ根元ヲ言上仕ケルハ抑彼南蠻
国王已ノ領地五箇國ノ物成ヲ其料ニ當テ毎年商船ト名付テ
金銀珍寶織物器物等ヲ日本ニ渡シ諸人ニ邪宗門ヲ勧入ル事

年〻伴天連入満(イルマン)方ヨリ大帳ヲ作リ何年ニ何千人何百人ヲ勧入タ
ル由其人數ニ應シテ褒美ノ諸品ヲ与フ昔年ヨリ此方術ニテ南海ニ
有之呂宋国ノヒスパニヤ国々モ南蛮人方ヨリ珍奇ノ財物等ヲ贈
リ初ハ僅ハカリノ地ヲ借リ寺ヲ立密々ニ切支丹ノ法ヲ勧シカハ其
国ノ愚民トモ彼宗門ヲ信用シテ遂ニ南蛮人ニ一味同心シ我国
ヲ輙ク蛮人方ヘ奪ヒ取シタリ扨其後ハ奪ヒ取シ国々ニ蛮人方
ヨリ守護人ヲ居置ソノ地ノ出産諸物金銀一切己カ得分トシ
三年目ニ其諸品ヲ本国ニ運送セシメシ由言上ス猶又畿内西国
諸處ニ隠居タル僧徒共数多駿府ニ被召稠シク御穿鑿ヲ
遂ラレシニ件ノ僧言上ノ趣一々明白ナリ於是切支丹ノ御制度天下統
為厳厲之旨被仰出タリ則畿内ノ御改ハ長倉伊賀守被仰付西国方
ノ御改ハ山寄長門守ニ被仰付京大坂堺奈良伏見其外諸處ニ
於テ改出セシ邪宗門ノ者共悉ク五條河原ニテ斬罪セラル尤彼
徒ノ内ニモ邪心ヲ翻シ正道ニ帰誠シ改宗ヲ願フ者ハ轉ト名付
テ助命セラル
慶長十八年癸丑大久保石見守狂乱ニテ死失セリ死後諸国金
山ノ御勘定有シニ莫大ノ私欲アリ所持ノ金銀財物ヲ點検有シニ
寝間ノ下ヨリ二重ノ石櫃ノ内ヨリ一ツノ箱ヲ取出セリ其箱ノ内ニ南蛮
国ニ日本ノ寶物武具等ヲ渡シタル目録又彼国ヨリ責来ラレタル
密通ノ書状アリ又大名旗本ノ内一味連判誓書ソノ外年々切

支丹宗門弘マリタル趣ノ書状數百通アリ此旨御聞ニ達シ其親族
不残罪科ニ処セラレ縁者共軽罪或ハ流罪追放等被仰付其
後大名旗本ノ内何タル子細モ定カニ知レス身上滅亡セシ人々アリ
是皆石見守誓書ニアリシ連判ノ衆中ナリシ由ノ風聞ナリ
同年大久保相模守ニ被仰付五畿内中国西海諸處ニテ邪宗門黨
類共ヲ搦取リ其地頭主地頭ニ預ケ置翌十九年両宮權左衛門
ヲ長崎ニ被差越前年以来諸国ニ預ケ置シ邪宗門ノ者共百
余人其内ニ高山右近（摂州高槻城主）内藤飛騨守（志州鳥羽城主）両人武門ノ人々タ
リトイヘトモ深ク邪宗門ノ信敬有シユヘ正法ニ可帰旨數度
上意有之トイヘトモ悪執ニ染着シ忠義道ヲ忘却シ遂ニ帰正ノ
志無之下賤ノ囚人同前ニ阿媽港ニ流刑仰付ラル

一阿蘭陀人忠節之事　元和三丁巳年阿蘭陀船洋中ニテ唐船
造リノ船ニ行逢シニ船中ニ伴天連ト思シキ者數人見掛シ故其頃
ハ阿蘭陀船平戸ニ着船ノ砌ナレハ彼船ヲ引来松浦壹岐守ニ此
旨訴ヘ出タリ壹岐守ヨリ長崎御奉行所ニ申越サル即刻長谷
川權六平戸ニ行向ヒ委細穿鑿ヲ遂ケシニ此船泉州堺常陳ト
云者呂宋ヘ為商賣相渡ル船ナル由船中ヨリ蠻国文字書翰
數通捜シ出ス平戸通詞森助右衛門ニ和解被仰付之処蠻国ヨ
リ日本ニ隠レ居タル伴天連方遣ス書状ニテ日本ニ於テ切支丹宗
門ニ傾ク者過半有之ハ即刻注進スヘシ軍船數多可差越ナトヽ

書述タリ依之船中ノ伴天連并常陳ヲ長崎ニ搦来リ火焙其
外一船ノ者不残軽罪セラル此節阿蘭陀人ニ忠節ノ御褒美成下
サル

一蠻人ノ種子阿媽港ニ被相渡事　寛永十三丙子年（奉行柳原飛騨守馬場三郎左ヲ門此）

（年向後日本ヨリ異国渡海一切御停止被仰出）南蠻人是マテ長崎在留内出生シタル血脉ノ種子
共御穿鑿ノ上男女二百八十七人阿媽港ニ被相渡但親子兄弟
相離テ市中可及騒動モ難計由ニテ大村家被仰遣彼地ヨリ数十
人被差越警固有テ乗船セシメラル

一薩摩ヨリ南蠻船送来事　寛永十四丁丑年薩摩ヨリ南蠻
船一艘送来此船琉球ニ漂着由松平薩摩守ヨリ琉球ニ差置
シ役人捕之薩摩ニ挽来シテ直ニ當湊ニ差送ラル猶シテ被遂
御穿鑿之処伴天連六人日本人三人邪宗門ヲ可弘タ日本ニ忍
ヒ渡リタル由白状ス則禁獄有テ江府ニ被仰上此時九州大名中ニ
御奉書被成下之　寛永十年十月島原一揆天草四郎之事累之

一南蠻人渡海一切御制禁之事　寛永十五戊寅年太田備中守
長崎ニ被差越向後南蠻人日本渡海一切御制禁被仰出則在
津蠻船同出島在留ノ蠻人ニ一人モ不残帰国被仰付向後決テ
渡来マシキ旨稠シク被仰聞尤太ル天正年中邪宗門ハ御制禁
ニテ高賣一編ニ渡来ス八御免ニテ猶又去ル年ヨリ蠻人ヲ出
島屋敷ニ被差置シ処一圓邪宗門ノ餘黨断絶セス剌ヘ今

度島原一揆及籠城事ナル故者ノ通急度被仰出之由也此時
島明キ屋鋪トナル

一南蠻船入津直被追返事　寛永十六己卯年南蠻船三艘入
津シ前ノ通渡海御免被成下タキ願申上タリ則沿ノ言上ノ処并上
筑後守當表ニ被差越去年渡海御制禁之趣急度被仰出之
処今度押テ渡来リ甚以不法至極也此節迚ハ被差免之間若
重テ今渡海急度御仕置可被仰付旨直ニ令帰帆ニル且又此
節長崎町中ニ有之諸厄利亜人ノ種子五十人蠻国ニ被相
渡

一南蠻船焼捨之事　寛永十七庚辰年五月十七日南蠻船一艘
七十四人乗組入津ス此船又々渡海御免ノ願トシテ渡来ル由即刻江
府ニ言上有之処同六月六日上使加々爪民部少輔被差越去々年
以来渡海御制禁之旨稠敷被仰渡之処又々今年モ渡来リ
日本ノ御国法ヲ蔑如スルノ仕方其罪科甚以軽カラス不殘死罪
可被仰付ト云ヘトモ日本ノ御法度ヲ本國ノ者共ニ告知ラシムヘシト
テ聞ヲ取セ六十一人切捨十三人助命アリ本船ハ積荷物金銀
等其侭ニテ西泊前スゴノ海上ニテ焼捨ル彼十三人ニ唐船造リ
小船一艘下シ給リ飯米新水等相添七月十九日令帰帆ル
一薩摩ヨリ邪宗門ノ者送来事　寛永十七庚辰年　奉行板植平右衛門　馬場三郎

左エ門寛永十五年南蛮人
渡海一切御制禁被仰出　薩摩ヨリ伴天連五人邪宗門之日本人二
人領内下甑島ノ洞穴ノ内ニ隠シ居タルヲ其所ノ役人捕ヘシ由當
表ニ被差越糺シク被遂御穿鑿之処先年日本ヨリ追返シシ
伴天連共阿媽港ニ居住シ今度為謝礼銀二貫目唐船ヲ差遣
シ便ヲ薩摩地方ニ船ヲ寄セ彼島ニ御シ置唐船ハ行方不知成
タル由白状ス則江府言上有之処不残斬罪仰付ラル
一筑前ヨリ邪宗門ノ者送来事　寛永二十癸未年五月十二日筑
前國梶目ノ大嶋ニ小船一艘十人乗組陸ニ上リ水ヲ取ル其形
月代ヲ剃リ日本風ノ如キ衣類ヲ着シタル尼眼サシ鼻ノ高サ
常ナラサル故所役人告知シム仍テ捕ントスル内急キ船ニ乗帆ヲ揚テ
逃出ル跡ヨリ追掛ケ同國地ノ嶋ニテ捕ヘ筑前城下ニ注進セリ依之
松平右衛門佐方ヨリ右ノ者共長崎ニ差遣シ御奉行山崎氏糺
シク被遂穿鑿之処伴天連共邪宗門ヲ勧ムヘキタメ日本人
ノ形ヲ學ヒ相渡ル由白状セリ即刻江府ニ言上アリシニ其者共江
府ニ可差越旨被仰付則通詞西吉兵衛名村八左衛門目明仲菴
ヲ相添差上ル此時西国大名中ニ御奉書被成下之斯テ右ノ者
共江府ニ参着シ委細被遂御穿鑿之処彼等非義ヲ悔シ宗
門ヲ轉ス旨願訴ヲ依之江府小日向ニ切支丹屋敷ヲ被立彼者
共一生牢下シニ仰付ラル

一林友官邪宗門之者訴人之事　寛保元甲申年　奉行山崎權八郎
馬場三郎左エ門　長

崎在津ノ唐人林友官異名小歌八兵衛ト云者アリ此者日本ノ刀服指
ヲ唐國ニ渡スヘキ密事露顕シ入牢被仰付既ニ御仕置可被仰付之処
彼者切支丹訴人ニ可出由ニ付助命被差置処林友官追付跡
船ヨリ邪宗門ノ者可渡旨訴之然ル所同年八月廣東出ノ唐船一
艘入津ス彼船委細被相改処阿媽港ノ書シ物ヲ捜シ出シ船中
ノ唐人稠シク拷問有シ処黄五官楊六官其外邪宗門ノ者四人
有之由白状ス此旨江府言上有之処井上筑後守家老岡島
左馬允當表ニ被差越仍テ御奉行山崎氏立會ニテ稠シク被遂
御穿鑿之処此五官六官非義ヲ悔ヒ為御忠節訴出ル然船
ヨリ又々黄順娘周辰官ト云邪宗門ノ者可渡ノ旨然ル処同十一月

廣東出ノ唐船一艘入津ス則訴人ノ者ヲ見セシメ稠シク被遂御
穿鑿之処黄順娘周辰官其外三人都合五人邪宗門ノ者ナル由
白状ス則船中ノ者入牢被仰付追々江府言上有シ処同十二月林
友官外ニ唐人二人共ニ三人通事頴川藤左衛門相添被差越之
処於江府猶又御糺議有之処長崎ニテ白状ノ通訴之此唐
人共阿媽港ニ數年在住シ邪宗門ヲ授リ去ル寛永十七年長崎
ニテ蠻船ヲ焼捨シ其節十三人助命ニテ被追返シ事等委
シク物語ス猶又此以後邪宗門ノ者渡来ルヿモ可有之トテ三人ノ者ハ
命ヲ助ラレ宗門改ノ日明ニ被仰付御扶持方被下長崎ニ歸シテ
古川町ニ有之御関所屋敷ヲ給ル右邪宗門ノ者九人内二人ハ

獄中ニテ病死七人ハ穴釣被仰付二艘ノ唐人共皆〻追返サル

一南蠻船二艘入津ノ事　一正保四丁亥年六月廿四日南蠻船二艘入津セリ即刻通詞ヲ以テ年来南蠻船渡海御制禁之処何ト

テ渡来ルヤト仰聞ル蠻人共前々ノ通渡海御免ノ御願ノ為ニ南蠻哥阿國ヨリ使者船ヲ差越スノ由申出ル同廿六日二艘ノ船湊内身根岩ノ前ニ入船セレム哥阿ハ南蠻国地名也南天竺ノ近方也阿蘭陀人スラアタト云意ニ太里亜国布留郁葛児国諸尼利亜国此三ヶ国ノ者共呂宋阿媽港三所ノ地ニ在留スト云

一艘　長二十八間　横七間　深八間　石火矢二十四挺アリ　外ヨリ見ル分

一艘　長二十四間　横六間　深四間　石火矢二十二挺アリ　外ヨリ見ル分

二艘乗組人数四百五十六人

使者名ゴンサルホウテンケイラデサウサ　一人名トウルトデコスタアホフレイ

有趣委細江府ニ言上有之松平筑前守ハ同廿八日當表ニ着アリ

西國在城ノ大名各當表ニ発向アリ在府ノ諸侯ヨリモ家老物頭等

數多軍勢兵船等ヲ揃テ来着有之御奉行馬場氏諸家ノ人々ニ向

テ彼船其マヽ差置若江府ノ御下知無之内不意ニ馳出ル者ナラハ

無詮事ナルヘシト種々評議アリ湊口ノ東西女神男神ト云岩アリ

此岩ノ角ヨリ大綱ヲ引渡シ船數百艘ヲ並テ繫キ合大ナル材木ヲ

筏ノ如クシ人馬ノ通路モナルヘキ程ニ船橋ヲ掛渡シ湊口ノ海上東西三町

四十三間陸路ノ如ク成タラハ彼蠻船容易ク馳出ヲシキトノ支度也則

諸大名家當湊ノ内外諸處ニ陣所ヲ構ヘテ厳重ニ警固有之

松平筑前守 人数一万千七百二十人 船数四百五十艘 細川肥後守 人数一万三百一人 船三百二十艘 鍋島信濃守
人 八千三百五十人 船三百二十一艘 上使松平隠岐守 人 六千三百十一人 船九十三艘 同松平美作守 人数千百
九十人 船八十艘 立花左近将監 人 三千八百七十人 船九十艘 寺澤兵庫頭 人 三千五百五人 船九十艘
小笠原信濃守 人 千二百七十八人 船八十艘 大村丹後守 人 二千六百三人 船三十艘 高力摂津守
人 千百人 船三十艘 惣人数合五万二百二十八人 内一万九千七百九十五人水主 船数合千五百
八十四艘 内二百九十八艘早船 斯テ七月廿八日上使井上筑後守御奉行崎擢八郎
當表到着ニテ御奉書持参松平筑前守ニ被相渡之
一筆令啓上以馬船長崎着之用廿八日晩被仕候御座候
御陣中日柳御紙幾枚心馬場ニ為ニ及上聞ニ紙数
使ニ渡ニ之ニ令ニ後入船ニ乃五人ニ元来ニ長崎ニ奉行

中之御書ニ為遂御使ニ被ニ差出ニ可ニ申聞ニ成ニ仕ニ可ニ申ニ仰出ニ
可ニ渡ニ之ニ為ニ恐惶謹言
七月十二日 阿部豊後守 阿部伯耆守 松平伊豆守
松平筑前守殿
右之御書拝見有之則御奉行所ヨリ通詞ヲ以蠻船之儀日本渡海
為厳禁之旨稠シク被仰渡処今度又々赦免ノ願トシテ令入船段
不法至極也決テ御免無之條急度帰国可旨被仰渡八月六日
二艘ノ蠻船無異儀帰帆セシメ畢シ又諸家ノ人数五万餘人
矣船千五百余艘前後左右ヲ打圍ミ湊外迄見送ラル其行
粧尤厳厲也蠻船出帆以後諸大名當表ニ五六日逗留有テ

各帰帆セラル

一阿媽港ヨリ伊勢之者送来事　貞享二乙丑年　奉行川口源左衛門　宮城監物

六月二日南蛮船一艘入津セリ即刻検使ヲ出サレ御吟味有之処蛮人ジュアンパッテレス。マニヤルキヤル二人ヲ始四十七人来組日本人十二人送リ来ル阿媽港頭人ヨリ蛮文字ノ書付一通真文字ノ譯文相添持参ス蛮国年號千六百八十五年ト有リ仍テ唐通事ニ譯文ノ和解被仰付処其趣當二月七日阿媽港内マルイラト云島ニ日本船一艘漂着ス依之日本ヲ大切ニ存シ奉リ態ト船ヲ仕立送進セシ由勿論此船商賣ノ存念無之故荷物ハ少モ不積来由先ヲ日本人共滞留ノ内切支丹ノ法義ハ敎サルヤト御糺議有之蛮人共固ヨリ双方ノ詞通シ不申殊ニ切支丹宗門ノ儀於日本嚴禁ノ段具ニ存居申事故決テ授不申旨之仍テ拾二人者御役所ヘ被召漂着ノ始末被遂御穿議之処我々伊勢國度會郡者去子八月十八端帆船江戸表ヘ薪商賣ノ為十月廿三日品川ニ着船シ商賣相遂ケ十一月中旬江戸ヨリ出船シ豆州浦川ニ滞留仕十二月二十五日出船セシ処其日暮方ヨリ伊勢大山沖ニテ北風烈ノ吹出三十二日ノ間山モ見ヘサル大海ニ吹流サレ當丑正月二十六日一ツノ島ニ流寄シニ阿媽港ト云所ナル由二月五日其地ヨリ引船来リ同七日陸地ニ上リタル所ニ年頃七十余ノ女蛮人長崎ノ者ニテ先年蛮人ノ種子此地ニ渡サレシ時ノ者ナル由少々日本詞ヲ覚ヘ居テ此女始終

懇ニ通辨致セシ由仍テ彼地宗門ノ事ハ不習ヤト御尋有シニ双方
詞不通ナレハ何事モ兼シ支無之由且又船中ニ多葉粉五十俵有
之処彼地ニテ代銀八百二十五匁ニ賣拂ノ上船ハ解放シ船板ヲ銀
六百目ニ賣拂其内ヨリ百五十目大工解賃ニ遣セシ由綱碇帆道
具ハ此船ニ積来シリ右之段委細江府言上有之処七月下旬御
下知有之南蠻日本渡海御制禁ノ上ハ漂着ノ者送遣スニハ
及マシキ支ナリ若重テ日本人蠻國ニ漂着セハ其地ニ差置トナリ
ヒ如何様共其方共心侭ニ相計フヘシ向後共ニ決テ此方ニ蠻船
ヲ差遣マシキ旨稠シク仰渡サレ粮米薪水ヲ與ヘラレハ八月朔日令
帰帆ラン其間近国ノ大名諸家ヨリ人数ヲ被差越警固有之右

拾二人ノ内七人ハ神社村ノ者ニテ五人ハ藤原村ノ者御下知ニ依テ
藤堂和泉守ニ被相渡各本所ニ令帰ラル

○貞享四年十二月諭唐諸人御制札三箇條之第一條ニ

一耶蘇邪徒（蠻俗云天主教）以罪悪深重故其駕船所来者先年悉
皆斬戮且其徒自阿媽港發船渡海之事既得止之自今
以後唐船若載彼徒来則速斬其身而同船者亦當伏誅
但縱雖同船者告而不匿則赦之可褒賞事

○禁耶狀諭大明商船（守重曰此條款ハ予カ嘗テ収藏スル御禁令ト云ヘル四冊ノ書ニ載タリ）

一日本國欽差使井上筑後守改重告諭大明國諸舟主狀

一頃年阿媽港蠻船託于商賣来于長崎竊張耶蘇邪道句

耶下疑當有蘇字

引蚩々之氓我　大君聰明英武早察之制禁嚴果闔國
畏服若有信彼邪法者発覺則罪夷三族然彼舩中匿載
虜伴天連者来誣民撩人故去年降　勅命絶阿媽港曰
無再赴于本朝若有重到則破其舩誅其人無唯類今茲
彼蠻賊不順嚴旨詐為乞和者来款　大君震怒遣使節
到長崎擒其徒七十人悉皆梟首燒其舩并罷財沈之于
海是汝曹所親見之也自今以往守我法賣舩往来多交
易則彼此利也

一蠻之自阿媽港来者既伏其罪耶穌之禁彌嚴然則彼必不
得来然彼猶欲其法弘則邪飾妖僧或為有髮或為無髮或
裝唐人之形或衣日本之服隱汝曹舩底到于　本朝竊惑愚民
亦不可知也然其猫眼尤鼻赤鬚鵎舌則烏度弐欲度之則大愚
也大罪也且又先是我民之入蠻而習我法為妖師者蓋可有之
他徒以之偽為日本人或為大明人潛載来乎是亦不可驗也如
此則汝合船無老弱皆殺而無赦且燒沈其舩者必矣向國之大
禁而後入者中華之制而汝曹所可尊也謹守嚴制勿騙于蠻

一灰聞蠻賊以重賄附汝曹而後竊匿耶穌妖人于舩底到于我
地而放置之海岸偽為不知所由来者其然乎若果然則早到
長崎司當申告之以汝曹為忠款而其恩賜於汝須多於彼
重賄若干也勿疑焉若隱而不告則必誅之急如律令

○寛慶三年午五月十八日所伺帳

覽

一南蛮船自他国海賊何様之海詰仕候
大猷院様御代堅西制禁之事ニ付今程
公方様御幼君ニ御渡之儀角不及 御下知ハ下ニ而相申候
然ハ不拘ハ何様ニ御下渡ニ而御帰国仕事
一右之通被仰付之上ハ江戸ニ居合候ハ
西国ハ申ニ及ハ
若し通ハ
一大変ニ成ハ

御日本へ下り申間敷事

一 諸浦番所之者松平右衛門佐申付番所之者ハ其者共番所ニ相詰候
下知可仕候、兼而ハ自然人入可有之候間、無油断申付之
左候ハヽ唯今迄之通可申付事

一 縦其外之船を入候儀度々有之候共其所ニて撰取帆下ケ
候而、一船より鉄砲を打かけ候儀有之候ハヽ兼而申付
石火矢を掛置、陸より舟を打きり川口ニて下ケ候由風ニまかせ迎
候者舟ニ而船をも追候而ハ不及是非候無用事

承応三甲午年六月十八日

豊後守判

讃岐守判

○明暦二申年五月十六日御下知状

覚

一 南蛮船自然令渡海於有之ハ訴訟仕候共
大猷院様御代従御制禁之事ニ候へハ今程
公方様御代ニ成候事ニ候間急度用ニ不及御下知ニ而相
計候而前々之通以来ニ何様之者共此儀之合図ニ帆下させ申事
一 其通ニ撰捕候上ニ江戸江注進仕候事　松平隠岐守ニも申

伊豆守判　雅楽頭判

甲斐庄喜右衛門殿
黒川与兵衛殿

すへし、但陸路より長崎へ相越候ハヽ、江戸へも可為注進事

一大久保加賀守方へも右之告知之、長崎へ之注進ハ陸路より振舞候間、其心得
させらるへき事

一鍋島信濃守・松平右衛門佐、当番之方ハ早速長崎へ相越
可申候、非番之方ハ、自然人入可申様子にて申越候ハヽ長崎
へ参候様子により出船にて可相勤事

付、石火矢・大筒并石火矢之玉ハ鍋島信濃守・松平右衛門佐より
当番之方、非番之方、長崎へ相越候節ハ何茂当番之方へ預置
、非番之方、長崎へ参候節ハ非番之方ニ付可遣
候事

一総港ニ船を入候儀無之候者、海上ニ而帆柱を折、帆を下ケ、方々ニ船を附、鉄炮
なと打かけ、不意の働仕候節ハ、兼而用意いたし置候石火矢を以て陸
より船を打ち沈め可申候、順風之時ハけしからぬ事も有之候間、船
を進退仕候ハヽ可為無用事

以上

明暦二丙申年五月十六日

豊後判　伊豆判

雅楽判

甲斐庄喜右衛門殿

黒川与兵衛殿

○明暦四戊戌年七月廿六日

覚

一大村於家の役仕者きりしたん様ニ候か中候ニ付大村因幡守
家来共ニ而右兵衛尉ニ御預ケ被仰付候也其後ニ付候得ハ御預ニ付候
加ハ一家ニ而出置候之者ニ而御座候者不残番所の者共ニ而も付候ニ
被仰付候候へ共ニ而出候ハ如何ニ而ハ可有之候之事

是ハ如何ニ而も可然事

一阿蘭陀船白帆注進仕長崎湊ニ船を入ル候節ハ二度ニ取付
候段ハ御制禁ニ候而御座候帆ニ付ハ御條目ニ相見ニ長崎
湊江ハ入不申候長崎ゟ凡三里沖ニ而相待候先年ハ阿蘭陀
阿蘭陀船ニ付何事も御座なく二候共長崎湊ニ毎
入ル候処此度一両年ハ阿蘭陀大船ニ而御座候へ共入候

然ル処此度ハ白帆注進仕候而も御湊江船入候ニ而ハ曲事ニ候段
上ニも船を湊江入レ不申石火矢場ゟ石火矢を打候ハ如何ニ而
是迄注進ハ候ニ付船を差留候ニ付湊江入候ハ曲
事ニ候段御制禁ニ而も有之候得共白帆ニ付候義ニ付
御湊白帆ニ付候ハ如何ニ而も相成候ニ付川口江船入候義無用ニ仕度
との段ハ長崎いつれもきりしたん之ものゝ家ニ而候ニ付異船ニ候
此上きりしたん之ものゝ家ニ而候ハ万一ニ而も見届可申
候様之事

是ハ御條目通り申付可然事

一阿蘭陀船ニ而松平隠岐守家来ニ而申出之候得共日根野織部

[illegible]

是ハ杉平左衛門何方ニ[illegible]

一長谷部[illegible]ハ去年杉平安兵衛[illegible]

[illegible]ハ五艘[illegible]

家来一通[illegible]

[illegible]

是ハ書付[illegible]

一[illegible]

[illegible]

是ハ[illegible]書也[illegible]

明暦元年四月廿七日

平野[illegible]

[illegible]

○寛文二壬寅年六月廿八日

覺

一南蛮形[illegible]

大猷院様[illegible]

[illegible]

一[illegible]

[illegible]

一大久保加賀守殿ハ[illegible]

[illegible]

一杉平丹後守杉平右ヶ門方[illegible]

[illegible]

一[illegible]

[illegible]

不届[illegible]

以上

寛文二巳年六月廿八日

[illegible]

[illegible]

[illegible]

寛文二巳年七月廿八日[illegible]

覚

一南蛮船[illegible]

人[illegible]

松平阿波守ニ而拾挺立目程鉄砲并人数ニ而差出候ニ付
御手ニ可申伺事

是ハ小笠原右京大夫大久保加賀守ニ而在候事

松平右衛門佐ニ相渡候御人数下知可申事

一 南蛮船沖ニ而見付候ハヽ早速注進方人数をつけ置帆掛候而往
之事下知次第甚別ニ而廻船ニ而乗込可相成候儀一應申候儀
ニ而も御免ニ而は難相成事

是ハ諸事ニ例ニ付而も毎度有之候事

一 南蛮船他の湊ニ入候ハヽ乗組の別ニ小笠原右京大夫龍田守ニ相成
待受之人数ニ而も被指図次第ニ而仕可申候 御用ニ而ハ可申入候

於長崎唐船并アラ力拾挺立目程鉄砲一艘の兜〆ニ而差置
来伺之事

是ハ前々之通可仕 御尋之事

一 他の湊ニ南蛮船着岸有之候ハヽ大村丹後守
御手当ニ而大村因幡守方へ下知可申候之事

是ハ大村因幡守方へ下知可申事

一 自然其之上一揆之様之事別ニ何人ニ而も仕立候ハヽ急度可致
之儀ニ付下知次第可申 御目付之事

是ハ前々之通可申 御出之事

一 異国之船唐人仕度之儀ニ付御目付前ニ而も可申付候

中分に遣わすべき事

是は新儀に成候間、新規に成候ハ

方吳書付を以て遣わす

一吳服の儀、新規に仕候ハ、

筋目を作り、新規に成候ハ

是は小梁田庄内保田兵衛殿と

一所に庄屋の儀、

是は兵衛殿と相談の事

以上

寛文二年七月廿八日

吳服殿　斯波殿

貞享二年二月廿三日南蛮船渡来の時書付

豊後殿

清田殿

尚以書を別紙差越候

一南蛮船渡来の儀、後藤村内情を聞、

松平市郎兵衛殿へ捨九郎を以て

南蛮船渡来の儀、松平筑前守殿へ

内密に被申聞候

一南蛮船の儀、

筑前守殿へ届候ハ、

使方筑前へ御渡候ハ、

[illegible]

一捨或人日本人[illegible]陸場[illegible]
[illegible]場所[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

用不仕私入[illegible]
[illegible]
日本人[illegible]

六月廿三日

杉田[illegible]　[illegible]
大[illegible]
川[illegible]

南蛮人[illegible]

一南蛮天川[illegible]日本人[illegible]
[illegible]捨或人[illegible]

候得共彼船之改方者無之勿論制禁之品ハ深く隠置候ニ付着岸之節其上
守衛之役方立会之上御取締相成候ニ付今般用捨有之候時々帰帆
之節ニ付向後猶又猶候得共其節御改方之趣御伝達之上尚又
抜荷之儀今般日本人ニ通詞共ハ勿論老中より申遣候趣ニ而相守
為様相守候様八木ニ而右之趣書付を以出帆之節申渡可申事

以上

六月廿三日

以別紙申入候

一今般入津之南京船之儀是迄之通相心得候様船改之上掛合可申候

手当帆前ニ付候處去ル廿二日申合山城様御役人江候御用懸り南京船入津之
之上御取扱方相伺候處例格之通相心得候様被仰渡候
而者可為追々御改被成候趣御渡被成候得共御取扱
御役所ニ而御改之上相心得候様御申聞之上御請書
面之通ニ而相済候ニ付御用之儀南京船入津之節御改役人江
書付ニ而書入申候右一通相添御用向相伺候之儀ハ不入物ニ而相済
之書付を以御沙汰之上御別紙相添差出申候事

一今般南京船帰帆之節有之浦役之儀先達而申付置候処船御
帆前御伺浦役ニ而申付置候処御伺済之上御下知之通
出帆之節ニ付御届申候得共御沙汰之上申付候事

一南蛮人會見通詞共證文之事不入儀ニ候得共彼本国ニ而致
通用申之通底而證拠無之事候得共證文取置候へハ
是非之段ニ付通詞共ゟ證文取置候様ニ申付候同罷在
不入物ニ候得共此方ゟ申付候ニ付差出之候事
一南蛮人之儀奉行所ゟ八木ニ絵図ニ而改之但是非絵
ニ而付為之御法ニ而朝鮮人対州ゟ是ヲ附候
例一日ニ人ニ而七拾多人数之積ニ而改候前絵図ニ
八船中ゟ改日積ニ而是ヲ候ニ付船中廿九日之
日積仕候只出陣[illegible]八拾ニ絵候[illegible]
御法朝鮮人接待方難用今[illegible]今之内

以来渡ニ此段を何の仕候とも上ニ船出紅毛一條御
書付候間此方ゟ申付候[illegible]
一天川ゟ之船校又ハ左之通押代々切支丹様一通相
蛮人方通[illegible]入物仕[illegible]
也又天川ゟ船帷子等船中改[illegible]
帰[illegible]関様[illegible]
其山[illegible]申[illegible]事
一[illegible]菓酒肴[illegible]
又[illegible]用[illegible]酒肴[illegible]
一[illegible]御座候

一今度西船ハ拾五人ニ日本人ニ成ル者ハ世八蕃
屋揚屋ヘ下ル事ニ山城ヲ長ク作間方ヘ下ル事
以上
六月廿三日

宮城監物
川口源左衛門

覚

一寛永三年丑六月二日南蛮船ヲ被入府南蛮人ハ日本
人拾五人案内ヲ取ル事
一右ノ日本人伴ヲ者ヲ被仰付丑三月七日大川源右衛門

以外ノ者ハ徳船ヲ仕立ル迄ハ長崎ニ入ル別
捕使ヲ以相手ヲ取ル則南蛮人ハ日本人ハ出ス事
一蕃船使ヲ付ル慣例ハ清国ハ大村周防守ヲ出ス
ヲ長崎ニ南蛮ハ蕃船ヲ出ス
ヲ長崎ヲ南蛮船ヲ長崎ヲ出ス
蕃船ハ南蛮ハ長崎ヲ出ス
蛮船ハ古船ハ慣例ハ
海ヲ出ス
一日本人ハ長崎ヲ船中ヲ出ス
一日本人ハ南蛮船ヲ長崎ヲ出ス

拙子ハ清国ニ用切之冊家ニ候不日帰国致候筈ニ付
内々ニ芝雲鑒ニ及ヒ及度之事
一新聞紙ニ不足ニ付隔日ニ発行之事
代価値下之事ハ不足之新聞不拘之為ニ滞
新中ニ而取之事
一彼新聞紙ハ後六月廿三日之清報ニ
七月廿日之上海ニ而ハ通信之為ニ
順風次第帰帆在之ニ及ハ送風次第
清新八月紙ハ順風出新聞紙無之ニ付帰帆ニ
新又ハ尾野毋之見届所分迄之事

日本人拙宅人之使之振ニ清国ニ有之ニ付
但拙宅人不行合ニ付遣ハ別紙目録之通
丑九月日

川口源五郎

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan